グリム童話の世界

―「二人の旅職人」（一〇七）を中心に―

飯豊道男

一

グリム童話にはしばしば職人が登場する。「二人の旅職人」（一〇七）もそんな話の一つである。街道でひょっこり靴屋と仕立屋が出会う。同じように靴屋とか仕立屋が出てきても、三九番の「小人、その一」の靴屋とか、二〇番の「勇ましい仕立屋」の仕立屋のように、わが家が話の出発点となっているのではない。

二人とも旅に出ているのである。旅が二人の生活と話の背景にある。二人の職人も話もともに旅をしているのである。メールヒェンはどこかにとどまることもあれば移動することもある。

移動の跡は話に刻まれている。新しい土地でそれが意識されることもあるし、意識されないままいつのまにか消失していくこともある。

話の移動が話だけでなく、語り手の移動を伴うこともある。そんなとき語り手が自分の世界を表現することもあるのではないか。しかも話の主役になり、なおかつ語り手を務めるというようなことがあったのではないか。メールヒェンは私的財産というよりも、ある集団の共有財産として意識されたこともあったのではないか。仲間意識にはぐくまれた場合もあったのではないか。

旅する話は旅する人たちがいたことを前提にしている。

グリム童話に職人がよく出てくるのも、そんな伝承の背景にある現実にかかわりがありそうである。なにしろ職人は旅を経験しなければならなかったからである。職人の希望者はどこかの親方のもとに入門を許されると、そこで二年なり三、四年なりを修行する。徒弟時代がすむと、修行の旅に出る。それは中世から始まっていた。

二

K・シュニュルレはスイスのチューリヒで一三〇四年に粉屋、帽子屋、靴なめし工が旅に出たのが最初だとしているが（『中世の職人』1940.S.9）、ドイツでは一三七五年のハンブルクの革なめし工の文書に最古の遍歴記録があった（R・ヴィッセル『古い手仕事の法と習慣』第一巻　1929.S.591）。当時は旅に出るか出ないかは個人の意志に任されていた。このあと一三八九年にリューネブルクの靴屋が旅に出た記録がある。こんなふうにドイツでは一四世紀後半に、つまり日本の室町時代に旅に出て、よその親方のところでさらに腕をみがく動きがうまれ、一五世紀半ばに一般化した。一六世紀に入ると旅が義務づけられ、一人前に自立するには欠かせない前提条件となった。強制遍歴の時代になるのである。

どの位の遍歴期間があったのかは時代や業種によって違う。一五〇八年、リューベックの蝋燭作りは半年の遍歴で満足していたし、同じ世紀でも一五五九年、ハンブルクの製本工は同業組合に加入し、三年旅修業をしたあと、一つの仕事場で二年働き、最後の年に親方の娘と結婚という仕組みができていた。

二年の旅修行を要求した業種には一六〇一年の革なめし工、一六一四年の製本工、一六〇九年のパン屋、三年要求していたのが一六一九年のペンキ屋の場合である。都市によっても要求が厳しかったり穏やかだったり差があった。北ドイツの二三の諸都市ではリネン織り工に対して一年の旅修業を望んだ。個人差もあったらしく、ハレの刃物鍛冶は少なくとも一年、他のものは二年旅をして初めて親方になる権利を得た、と一六八五年の文書にある。

それが一九世紀になると、ドイツの比較的大きな国々では他国へ行って修業するのをきらうところが出てきた。こういう遍歴禁止令が出たのは激動する社会状勢の中で、国にとって好ましくない考え方が流入して国内が混乱するのを恐れたからだった。特にスイスへの遍歴が禁じられた。オーストリアの革なめし工の遍歴手帳（ヴァンダーブーフ）（氏名、出身地、顔、身体の特徴のほか、遍歴した先の親方の氏名、住所、期間、仕事ぶりの評価が書きこまれている）を見ると、同じ時期にボヘミア、ドイツのあとスイスで修業して帰ってきているから、国によっても規制が違うのだろう。遍歴は一般にドイツ、オーストリア、スイスといったドイツ語圏及びスラヴ語圏でなされ、フランス、イタリアのようなロマンス語圏にはいかなかった。従って遍歴によるフランスの思想的影響はなかった。

業種によっては内部事情から禁じられた場合もあった。最初の例は一三八五年にリューベックの琥珀の加工業者に出された禁令だった。よその土地での競争相手の出現をはばもうとしたのである。そのときはすでにハンブルクとリガに琥珀の加工業者がいたのだが。百年後の一五一〇年の規約には、無意味にな

ったのか、遍歴禁止の項目がなくなっている。同じように閉鎖的だったのは、ニュルンベルクの眼鏡作り、針金作り、トランペット作り、金銀細工師、ブリキ職人、金箔師、真鍮細工師である。ほかの土地にも同様の職人がいたのに遍歴を止められていた。先進技術をもつところはこうなり易く、一四一二年のクラカウ（現在クラクフ、ポーランド領）の帯作りの規定にもそういう項目がある。

こうした遍歴が可能になったのは道路事情がよくなったからでもある。

それだけでなく職人が組織化され、同業組合が狭い地域を越えて連合組織になり、広い視野から自分の業種の発展を願うようになったことも大きい。遍歴強制は宿泊施設の確保なしには考えられない。北の港町リューベックで、本格的な旅館が建ち始めたのは一四世紀だが、長逗留はできず、一晩しか泊めてもらえなかった。仕事仲間がいればすぐ次の宿がみつかり、数日泊ることもできた。

しかし同業組合は各地に定宿を用意した。そういうところでは仲間が集まれる集会室もあって、会議も情報交換もできた。

グリムの一〇番「ならずもの」に、「仕立屋宿」Schneiderherbergeという言葉が出てくる。雄鶏と雌鶏が山のくるみを食べに行ったあと、くるみの殻を車にして鴨に引かせ、飛ばしていくと、留針と縫針が一緒に乗せてくれという。町の門の前の仕立屋宿にいたのだが、ビールを飲んでいるうちに遅くなってしまったのだという話に、つい乗せてやる。ある宿屋（ヴェルスハウス）につく。ところが翌朝出立前に雄鶏はいたずらをし、留針と縫針で亭主を痛い目にあわせるという話である。

この仕立屋宿のような宿が各業種にあった。宿に入るときには挨拶をしなければならないし、何か質問されたときも作法にのっとって答えなければならない。挨拶の仕方や答え方で同業の職人であることが確認できるので、旅に出る前に文句をきちんと暗記しておかなければならない。アルコールも好き勝手に飲めるわけではないし、門限もきまっていた。親方のうちの食事は質素で、じゃがいもと酢漬キャベツくらいで、さもなければ小型パンでこしらえたムース、それもミルクでなく、ただの水でこしらえた物だった。仕事は一般的に朝から暗くなるまでだった。「仕事が始まるのは大抵朝五時だった。時には冬など朝は六時始まりで、夜終るのは七時と決まっていた」というような例もあった。報酬は固定給でない場合が多く、週給か日給でもらった。現物支給ということもあった。

職人はそういう遍歴時代をまじめに務めあげるのである。生半可な気持ちではやり通すことができない。それでいて世間からはみくびられた。一〇番のタイトルの「ならずもの」は賤民とか、浮浪者という意味ももっていた。留針や縫針はそういうものたちに属するものと見られていた。仕立屋の地位も低かった。

が、職人は希望する誰でも入れるというわけではなかった。

まず、正規な結婚をした親の子どもでなければならなかった。農村で生れた子は農民となるか、職人となるかだったが、農家の跡取りになれるのは一人しかいない。あとの子は自分の家か、親戚か、よその家の下男か下女になるしかなかった。そうでない道は職人になることだった。農村には経済的に正規の結婚ができない下男や下女がたくさんいて、そういう人たちの間でも子どもがうまれたが、そういう子は職人になれないのだった。厳しい制約の中で修行を積むのに、世間からは低く見られた。村の職人の家を見ると中心部にない。中心を形成するのは農家で、職人の家ははずれにあった。いまは職人たちは店を経営していけなくなって、ほとんどが村を去っているが、家は残っていることがあるし、村の人に訊いても職人たちの家がどこでも村はずれに位置していたことがわかってくる。

三

旅で出くわした一〇七番の二人の職人たちはなつかしかったことだろう。同じ仲間を服装とか外見で見分けて、まずはほっとしたかもしれない。彼らは何かにつけて「よそもの」であることを意識させられる。みんなに受け入れてもらえない、どこか違うものであることを思い知らされるからである。それが日常生活で骨身にしみているだけに、同じ職人仲間を見いだせば、つい冗談もいいたくなる。旅では挨拶を欠かせないのが職人で、それで思わず知らず声をかけてしまう。ところが相手の靴屋の様子は仕立屋の予想とは違っていた。

この話では一行目から二人の役割がはっきり定められ、仕立屋は善人、靴屋は悪人となっている。二人は対立がうみ出すお互いの運命を知らずに旅の道連れとなる。

それを知っている語り手は仕立屋のことを出会いの場面で「小柄な愛嬌者で始終陽気で上機嫌だった」と紹介している。二人を公平には紹介していない。初めから仕立屋の肩をもち、良い人間としているばかりでなく、小さいといっている。

メールヒェンの中の仕立屋はよく巨人と一緒に出てくる。その際巨人との対比で小さいことが強調されている。小さいものが大きいものを倒し、生き残り、出世し、幸福をつかむ。仕立屋と靴屋の運不運は「小さい」という形容詞一つでもう発端から予測されるから、靴屋とかそれにゆかりのある人たちには面白くないだろう。語り手は従って仕立屋か仕立屋びいきの人物ということになる。さもなければそういうことにこだわらないでいられる立場の、話が好きな、話を楽しめる人物だったろう。聞き手にしても人物紹介の段階で大枠の見通しがついたことだろう。

仕立屋は自分のほうに向かってくる相手の服装で靴屋と察しをつけると、親しくなろうとして歌ってからかう。相手はその冗談が通じないでむっとする。仕立屋はすかさず酒瓶を出して機嫌を取る。話に歌を挿入する伝統は現代まで引き継がれてい

る。私の印象ではそれは笑話に目立つ。歌は聞き手を話に誘いこみ、話を盛りあげ、話を転調させるときに効果をあげる。私の会った語り手は歌好き、音楽好きな人たちだった。音楽好きな人が語り手になっていたような気がする。語り手の資質には聡明さとともに音楽好きが共通していた。

靴屋が「一緒に旅をしようか」というと、仕立屋は「いいとも、ただお前さんにどこか大きい町に行く気があるんならね、そういうところなら仕事が途切れないしさ」「そうだとも、おれの狙いもそうなんだ。小さいところじゃさっぱり稼ぎにならねえ、いなかじゃ連中ははだしの方がお気に召してさ」と靴屋が答える。

こういう二人のせりふには実体験のにがさが漂っている。村の人たちは衣類を大事に着て、大人も子どももつくろいがしてあるのを当り前と思っていた。七〇年代のオーストリアでは日当りのいい家の前のベンチで五〇代、六〇代の女性がつくろいものをしている姿をあちこちで見かけた。オーバーエスターライヒ州ではクリスマスプレゼントに子どもたちにシャツ類をやっているのも見た。私は八〇年代に入っても隣接州に遠足に行くシュタイヤーマルク州の女子中学生が、着ていく服を幾晩もかけて裁ち、縫っているのを見た。何でも自分で作ろうとし、物を粗末にしない村では、仕立屋は暮らしにくい。

また七〇年代のオーバーエスターライヒ州の村では、靴をはいている子やはだしの子が一緒にわいわい外で遊び回っていた。ほかの村でもはだしの子を見かけた。八〇年代に入ると見かけなくなった。子どもの数も減った。はだしは夏のころだけのものだった。しかし一九三〇年代の山村の写真にははだしの子が写っているし、リヒターなどの一九世紀の絵にも牧童その他がはだしで歩いている姿が見える。オーストリアの農家で先祖が使った農具や生活道具を屋根裏部屋に大事に保存している家があった。そこに木のサンダルに革をかぶせ、一見革靴に見える靴があった。その革は一枚革でなく、もう一枚重ね、さらにつくろいがしてあった。日雇いの家に生れた人が書いた自伝に、日曜の朝、教会にお詣りに行くときはきょうだいが一緒に行くだけの靴がないので、代りばんこに出かけたとある。多少文数が合わなくてはきづらくても靴をはいていくというだけで誇らしくなれたのである。靴は貴重品だったのである。オーストリアのシュタイヤーマルク州のピュルクという無人駅で降りて急坂をのぼると中腹に小さな村がある。そこの食堂の壁に靴の同業組合の大きな貼り紙があった。元は靴屋だったのである。十数軒しか家がない村なのに、ここには徒弟もいたという。

実生活を反映する話の出だしの部分は、聞き手たちにとってもなじみ易かったろう。こういうところにメールヒェンの現実重視の姿勢がうかがえる。物語は現実の中からつむぎ出されていくのである。

町に入って二人で初仕事をするようになると、二人のかせぎに開きがでてくる。仕立屋はてきぱきと仕事をこなし、親方の

娘に別れのキスをしてもらえるが、靴屋の方はそんな具合にいかない。となると靴屋の胸のうちにもやもやしたわだかまりが巣くい、悲劇の芽ができる。王の都へ行くには大きな森を通らなければならないのだが、道が二つあって、一つは七日、もう一つは二日で行けるという。それに対し、仕立屋は二日分のパン、靴屋は七日分のパンを用意した。二人はどちらの道が近いのか遠いのかを知らないまま、遠い道を選ぶ。

当然仕立屋は三日目にはパンがなくなり、ひもじくなる。五日目に漸く靴屋がパンをくれるが、代りに仕立屋の右目をえぐり取る。七日目にもう一度靴屋にパンをもらうが、今度は左目をえぐり取られる。仕立屋が両方の視力を失ったとき森を出られた。

四

二人の職人の運命は森で急激に変化する。メールヒェンの森では日常生活の尺度で測れないことが起こる。優位だった仕立屋と劣位だった靴屋の立場が逆転するのである。

本来ならば旅慣れているはずの二人の旅職人はもっと慎重に行動してもよかっただろう。事前に二日と七日のふたつのルートがあるとわかっているのだから、どの道が長く、どの道が短いか、あらかじめ人に聞いておけそうなのに、そうしていない。途中で誰かに道を聞いた様子もない。だいたい森の向うに王の都があるなら、幹線道路だから人通りがありそうなのに、彼らは森にいる間誰にも会っていない。道標もない。時には行き倒れの人の供養碑が立っているものなのに、そんなものを見たとも話はいっていない。

中世以前のローマ人が支配していたころには、タキトゥスが『ゲルマーニア』に書いているように一週間とか、もっと長い日数をかけなければ通り抜けられないような森が現実にあった。しかしその後は森の開墾が進み、牧場や農地、人の居住地に変わって、途方もない森は減った。職人が旅するようになったのは中世以降であり、この話はもっと時代がさがり、一九世紀に近づいている感じで、二日と七日の森のコースを設定することは難しかったろう。二と七という数字も現実を反映させるために選ばれた数とは思えない。話をわかり易くするための数だったろう。

それにこの森には人の気配がない。旅人が通らないし、狩人の姿もないし、猟犬の姿も見られない。木こりの声も作業する音も聞こえない。鹿もかもしかも猪もうさぎもいないし、鳥もいない。泥棒も追剥も巣くっていないし、盗賊騎士の屋敷もない。

グリム兄弟が幼少年時代を過ごしたシュタイナウの『シュタイナウ町史』第三巻（一九七七）には、この町が面しているライプツィヒ街道に出没し、のちに捕まって処刑された泥棒たちのことが肖像画をかかげてこと細かに報告されている。『ライ

プツィヒ街道』（一九九〇）という、この町を含むフランクフルトからライプツィヒに至る街道展の大きな二冊本には泥棒がいたあたりの森の写真ものっている。

ライプツィヒ街道展のカタログによると、二〇キロから三〇キロごとに宿屋があったという。一日の旅程を考慮した休憩施設が街道筋にはあるものなのである。実際森に入ってもぽっかり空閑地があって、いまでも孤立農家とか牧場が見えたりする。そういう農家や山上牧場の一軒家では人を泊めたり、食べ物・飲み物を提供してくれたりする。

『シュタイナウ町史』にはシュタイナウという小さな町の旅館の一つ一つの成立時期から経営者の交替までが仔細に書いてある。私は八〇年代に半年ここにいたとき毎日食べ歩いて職人が集まる店とか、若者が集まる店、商店主が顔を揃える店、ホワイトカラーの人や家族が集まる店、トルコ人とかギリシャ人の集まる店というような特色がそれぞれの店にあるのに気づいた。それで思わずいまと昔を比較しながら旅館の歴史を読んだが、こうした店ができたのは一六、一七世紀のころだった。同じ街道沿いでもグリム兄弟がうまれたハーナウはさすがに領主がいたところらしく一四八五年に宿屋ができている。その近くのゲルンハウゼンという古い町では一五〇六年に獅子屋についての言及がある。この街道はモスクア遠征に破れたナポレオンが敗軍の将となって通ったところでもある。物乞いも多く通った。幾多の戦乱があり、将兵たちも通り、宿泊を強制した。街道筋の村には一六世紀にすでに御者の多い村ができるなど物資の輸送も盛になった。

そんな現実の街道や森のあれこれを考えあわせると、この森は異様に静かである。二人は森の中で現実から離れてしまっているのである。

現実に基づいて始まった物語は、森へきたことによって物語独自の世界に入る。二人がいる森は非現実の森になっているのである。異次元を通過しなければその先へ進めなくなっているのである。メールヒェンは現実だけではなく、非現実も経験しなければ味わうことができない仕組みになっているのである。メールヒェンの世界観はたえず現実ばかりでなく、非現実の存在を自覚することを要求している。非現実の、非日常の時間と空間があることを忘れては世界は把握できない、と思っているようである。

ここで仕立屋は失明という「死」を体験している。「死」に突き落とされたところで森が終り、彼は森の外に出るのである。彼の「死」が失明にとどまるところに救いがある。彼の死は新しい生を準備するために通過しなければならない儀礼のようだった。死は森の中で執行者である靴屋しかいないところで秘めやかに行われた。

五

死から生への帰還に、復活に関与したのは処刑場の二人の罪人である。秘儀を目撃し、用意し、完成させたのは頭にそれぞれはしぼそからすをとまらせた二人の罪人だけだった。

仕立屋が日が沈むころ、靴屋の杖をたよりに森を出ると、処刑台があった。彼はそこに置きざりにされる。夜明けに仕立屋が眠りからさめると、頭上にぶらさがっている死人たちの会話が耳に入る。今朝処刑台から垂れる露で目を洗うと、目が見えるようになると。仕立屋は早速ハンカチを露にぬらして試みたところ、果たして目が見えるようになった。

森に接している処刑場の位置と、はしぼそからすを頭にとまらせている死んだ二人の罪人の存在は極めて象徴的である。死から生が与えられる。輪廻のような生命観がここにはある。

しかし街道ばたに処刑場があるのも現実だった。ライプツィヒ街道の場合はハーナウの近くにそれがあった。ただ、旧道にあったので、現在の国道には面していない。旧道は新道とコースも違い、驚くほど狭い。私はオーストリアのドーナウ河沿いの道を村の人に案内してもらったとき、突然ここは処刑場があったところだと聞かされたことがあった。寂しい感じがするだけで、いまは何の変哲もないところだった。魔女を処刑したところだ、とよその村の小高いところでいわれたこともある。そういうところもいつか忘れられていくのだろう。

処刑場は現実と非現実がからむ巧みな設定によって、新しい生命、生活への橋渡しとなっている。

仕立屋は森の通過儀礼によっていまや新しい能力を付与される。死人の言葉もわかるようになっているし、動物たちの言葉もわかるようになるのである。それが彼の次の飛躍へのきっかけを作る。

六

仕立屋は今度は動物たちと出会う。まず栗毛の子馬に出会い、それに乗って都まで行こうとすると、子馬に頼まれて断念する。こうのとりを焼き鳥にして空腹をみたそうとすると、命乞いをされ、承知する。池の鴨親子の命も奪わず、蜜蜂たちに乞われて蜂蜜を食べるのも我慢する。どの場合も動物たちのいうことが理解できたことが彼に大きな幸運をもたらすことになった。なぜこれほどの幸運が彼に用意されているのか。

「甘いおかゆ」（一〇三）の娘は一行目の人物紹介で「貧しい信心深い娘」といわれている。信心深い、敬虔な、といわれる人物はグリムではすべて幸福になる。正統な宗教意識をもつものが災厄をまぬがれて幸福になる話はわかり易い。この話に接する人々に、手本となる生き方を暗示しているのである。それに対し教義宗教の考え方になじまない運命論的な幸運に恵まれる話はどう考えればいいのか。キリスト教以前の原始的な考え方、感じ方が話の構成の根元にあるのか。あるいは仕立屋にかかわる人たちが自分たちの財産となる話にするために幸運が約束さ

れるのか。

仕立屋は靴屋に出くわして思わぬ多難な人生行路をあゆまされているようで、その実一直線に最終目標に向って進んでいっているようにも見える。苦難は試練と見えて彼の幸福を大きくするための栄養になっている。

彼はいくらもしないうちに王さまお抱えの仕立屋に取り立てられる。そこにはあの靴屋が同様にお抱えの靴屋になっていて対立の因縁は激化する。靴屋は仕立屋にひどいことをしたのが王の耳に入らぬように、仕立屋をおとしいれる策略を考える。仕立屋が昔なくなった金の王冠を取り戻してみせるといっていると王に吹きこむ。仕立屋は王に難題を出されても靴屋のたくらみとは想像もしない。ただ王がとんでもない要求をもち出したと思って、こんなところに長居は無用と王宮から逃げ出す。

都の門を出て池にさしかかると親鴨が話しかけ、早速王冠を底から拾いあげてくれる。王宮にくる前に出会った動物たちの登場は、こういう動物感謝の話の前段階だったことがわかる。

いじめ役の靴屋はどうにか仕立屋をなきものにしてくれようと、仕立屋が蝋作りの王宮の模型が作れると豪語していると王に密告する。それには蜜蜂が仕立屋に加勢して難なくやってのけてくれる。靴屋は三度目には仕立屋が王宮の庭に噴水を出せるといっていると出まかせをいう。すると今度は馬が電光のように庭を三度かけめぐって倒れた。するとそこから水が勢いよくふき出してきた。

それでも靴屋はこりずに仕立屋が王女しかいない王に、王子を空から運んでこさせてみせるといっていると密告する。これにはこうのとりが期限の九日目に井戸から王子を運んでくる。

こうして不可能と見えた課題が次々に達成される。靴屋は苦しまぎれに、でたらめに思いつくことを口走っていたようだが、そこに一定の方向性があったのに気づく。

メールヒェンは不用意な要素で作られていない。念入りな検討をへた上で物語ができているのである。

この場合、最初に王家の過去にかかわるものが発見された。王家の出自はあいまいなままではすまないのである。王家の出自の正統性が実証されなければならない。実証する物が存在する必要がある。そういう王家の要請がまず王冠の発見によってかなえられた。これで王家は堂々と世間に誇示できるものができたわけである。

次の蝋細工による王宮の完全な復元は現在にかかわっている。王宮建設の高い水準は国力の綜合成果を示すばかりでなく、王家が財力豊かで繁栄しているしるしでもあった。

庭の噴水は馬のふしぎな働きによってなされた。馬が稲妻のように早くかけめぐったという比喩は、古くからドイツの、北欧の神話で尊敬されてきた雷神を思い出させる。馬が神馬だったことは、タキトゥスの『ゲルマーニア』にも出てくる。馬は高貴な軍馬である前に神聖な動物だった。そういう馬が噴き出す水は理想郷を具現化している。自然が王家の光背となり、神

の祝福の輝きを示していた。

さらにそのあとに王子が出現するのである。世継ぎの王子の誕生は王家が未来に向かって永遠に繁栄していく象徴である。動物の協力によってなされたことが、人間ばかりでなく、生きとし生けるものが王家を盛りあげてくれる明示である。

靴屋が果たせともち出した課題は果たしたかった課題なのに、あまりに難しいことなのでこれまで果たせなかった問題ばかりだった。過去、現在、未来にまたがる壮大な課題を、仕立屋は一挙にやってのけた。

こうなると仕立屋の邪魔をしていた靴屋は悪い男ではなかった、先導者であったとさえ思えてくる。

しかし物語の中では靴屋はあくまでも靴屋であり、仕立屋はあくまでも仕立屋なのである。

ふしぎな呪術力を発揮する仕立屋は王女と結婚する。現実と非現実がモザイクとなっていた物語はここで現実にたちもどる。といっても仕立屋が王女と結婚し、王となるなど破天荒の出世物語で、現実性があるように思えないが、こういう結果が聞き手を満足させたのだろう。

締めくくりは悪役のその後の運命を語っている。都を追放された彼は森の手前の処刑台まできて疲れはてて倒れこむ。すると罪人の頭にとまっていた二羽のはしぼそからすが舞い降りて、靴屋の目をくり抜いた。錯乱して彼は森にかけこみ、行方がわからなくなった。

ここで一つ気になるのは二度出てくるはしぼそからすの扱いである。仕立屋が靴屋に二つの目をくり抜かれて森を出てきたとき、処刑台の二人の罪人の頭上には二羽のはしぼそからすがとまっていた。ところがそういわれているだけでからすは何の役割も果たさない。それなら何故はしぼそからすが一羽ずつそこにとまっている必要があったのか。なぜ罪人の死体がわざわざ口をきいて、露をぬればいいと教えるのか。むしろはしぼそからすが教えた方が、それなら結びとも照応してよかったのではないか。現にこの話の最初の形が初版第二巻（一八一五年）にのっていた。二一番の「はしぼそからすたち」である。ニーダーザクセンの貴族ハッセンプフルーク家のアウグストが歩哨に立っていたときに同僚から聞いた話で、主人公は兵隊だった。彼も悪い兵隊仲間に両目をくり抜かれるが、処刑台のはしぼそからすたちの話から露で失明をなおし、王女と結婚することになる。悪い仲間たちは逆に処刑台のはしぼそからすたちに目をくり抜かれ、つつき殺されてしまうのである。しかしそれまでの版によく加筆した弟のヴィルヘルム・グリムは、この部分は六版、最終七版でも書き直すことがなかった。

「二人の旅職人」が載ったのは随分遅く、一八四三年の第五版からである。初版の第一巻（一八一二）と第二巻（一八一五）が、一八一九年の第二版から合本で出るようになったとき、「はしぼそからすたち」は一〇七番となった。この一〇七番の「はしぼそからすたち」が第五版から消え、代りに「二人の旅

職人」がその番号でのるようになった。

差し替えた新しい話「二人の旅職人」は北ドイツの港町キール出身の大学生が、一八四二年にベルリンで報告したものだった。多分ベルリン大学のグリムの教え子だったのだろう。

ボルテとポリフカの注釈書（BP II. S. 468 ff.）によると失明と癒しをテーマにした話は、すでに古代エジプトや八世紀の仏教説話集にのっている古い歴史をもつ話だった。ただ時代の流れの中で主役の身分が変わってきている。仏教説話で兄弟という肉親の対立だったのが、一六世紀のドイツの修道士パウリの『冗談と真面目』（一五二二）では金持ちと奉公人が賭けをする話（四八九―四九〇）になっている。金持ちが世の中を支配しているのは虚偽と不実だというのに対し、奉公人は真実と正義こそが世の中を支配しているのですという。が大商人、修道院長、貴族の三裁判官は金持ちの意見に同調し、奉公人は木に縛られ、両目をくり抜かれた。夜中に集まった悪霊たちの話を聞いて奉公人は木の下にはえる草で視力が回復し、金持ちの娘の目もなおし、彼女と結婚した。彼の以前の主人は真似して木の下に行ったが、却って悪霊たちに両目をくり抜かれてしまう。

この話には種本があって、パウリはハンガリーのフランチェスコ会士のペルバルトの説教譚を基にしていた。種本の一五世紀の話では、視力を失った市参事会員が天使の指図で菩提樹の葉にたまった露で視力を取り戻し、王となっている。もう一人の男は失明させられた。

一六世紀まで本で伝えられた話がその後は口承の世界に入ってきたらしい。一六世紀の金持ちと奉公人の関係は一九世紀には兵隊とか職人の関係になった。

口承の段階でどうして兵隊とか職人になったのか。

兵隊はメールヒェンに登場するとき、きまって冴えない兵隊になっている。メールヒェンには王が戦場におもむく話もある。そういうときは王妃の身の上に不吉な事件が起こり、十字軍伝説を思い出させる。王女の婿選びが馬上試合の優勝者によってきまるというのも中世風の話である。ところがメールヒェンには中世の物語には出てこない恰好の悪い兵隊が出てくる。お払い箱になった兵隊である。メールヒェンには近代人の等身大の実像らしいものが出てくる。近代説話としてのメールヒェンは模範的な人間像ばかりでなく悪人も描けるようになっていた。表現は中世よりも自由になり、世相を敏感に反映した。ペストのような悪疫が繰り返し流行し、不作と飢饉も断続的に襲ってきた。戦乱も絶えない。そういう世相をひとごととせず、わが身の問題として、それを物語化した。自分を主題として家族や仲間うちで語る習慣を身につけた。失業した兵隊がメールヒェンの中によく出てくるのは、それだけそういう人たちがいたということであり、その人たちが自己の客体化の方法を獲得したということにならないか。

ことばを変えればメールヒェンは思いの外、近い過去を描いていたのではないか。近い過去に関心をもっていたのではない

か。それを祖父か、曽祖父か、それに近い過去に仮託して物語を語っていたのではないか。どことも知れないが、自分の土地に近い風景の中で伝承された物語を組み立て直して語っていたのではないか。そうでなければ聞き手の関心をよばなかったからである。「二人の旅職人」の話にしても一九世紀初めの語り手と聞き手にとって縁遠くなった時代と環境を描いていたのではなかったのではないだろうか。

確かに仕立屋の仕事は古い。仕立屋が同業組合を作って服作りを始めたのは一二、一三世紀のころだった。しかし技術革新が目ざましかったわけではなく、道具箱の中身は一九世紀後半までほとんど変らなかった。ヘッセン州の田舎の農家では、いまでも炭を使う陶器製のアイロンが保存されている。仕立屋は大抵貧しかった。苦しい仕立屋の暮らしは一七、一八世紀に目立ったが、一四世紀末にはもう慢性的に貧しかった。彼らは一八世紀末まで、いい換えるとグリムの『子どもと家庭のメールヒェン』（一八一二）が出版されるちょっと前まで、町よりも村の方に多くいた。仕立屋は仕事を安い賃金で引き受け、頼まれた家で仕事をした。食事もその家で出してもらった。こんな暮らし方は二〇世紀初めまで残っていた。こういうふうなので、店をもっている仕立屋と渡りの仕立屋との間では仕事の取りっこがあった。現代オーストリアの助産婦の自伝は、祖母が家族で農家に一定期間暮らし、仕事がすむと次の農家に移動する機織りの子だったと書いている。こういう渡り職人の生活があったのである。

グリムの「二人の旅職人」というのも、親方になる前の職人が旅をしていたというよりも、一人前の仕事を覚えながら店がもてない職人の旅であったように見える。不景気風にさらされている人たちなのである。

西ドイツができたころの仕立屋の数は約一五万軒あったらしい。それが一九七〇年代には一万二千軒に減った。店もちでもこうなのである。大量生産、既製服の優位は一九世紀にもあった。一七、一八世紀でも仕立屋の息子はよく工場制手工業者のところで働く人間になったらしい。そうでなければ兵隊になるしかなかった。事情は靴屋でも同じだった。靴屋の同業組合の最盛期は一八世紀で終っていた。軍からの大量注文が設備を変えさせ、遍歴修業でじっくり仕事を覚えるやり方を滅ぼした。

ライプツィヒ街道では遍歴の職人が多く通ったのは一六八八年と一七〇九年から一七一〇年にかけてだった。一七世紀末から一八世紀初頭のころだった。

メールヒェンに登場する旅の職人像は、そんな幸せだった時代を反映しているようにも見える。同業組合員としては忘れたくない時代の思い出を、王女との結婚物語に変形させて誇ろうとしたのだろうか。同業組合のための語り、同じ仕事に携わるものが覚えて語り継いでいきたい話というものがあったのではないか。

しかしそういう伝承形態に変更を迫る波は、一九世紀初めに

はすでに来ていた。それを最初にあからさまに示したのがグリム兄弟である。

グリム以後でも例えば北ドイツで一八九九年にヴィルヘルム・ヴィッサーが採話した語り手は、日雇いが一二人で、群を抜いて多かった。そのほか仕立屋三人、羊飼い三人、庭師二人、左官屋、木こり、火夫、かご編み、夜回りが一人ずついた。それに女性が一三人いた。

U・ベンツェルが一九五〇年代にボヘミア北部で聞いたのも仕立屋五人、農民五人、指物師三人、木こり二人、労働者二人、車屋、靴屋、大工、居酒屋の主人、商人、鉄道員、鉱夫それぞれ一人、ほかに女性が三四人いた。農婦が三人、女性の仕立屋が二人、居酒屋の女主人が二人いた。

ベンツェルがボヘミアに接するバイロイト近くの南ドイツで一五年間に二三六話聞いた語り手は長く農家の下男をしていた小農だった。

戦後ハンガリーのショプロンからドイツに引き揚げてきたボイラーマン（ただし彼の先祖はオーストリア出身）は、G・ヘンセンに多くの昔話、伝説を語り、歌を歌い、一冊の本になった（一九五九）。ヘンセンは一九五一年にも一人だけの昔話、伝説、歌の本を出しているが、この語り手はオランダからドイツにきたペンキ屋だった。

というように一九世紀でも二〇世紀でも、グリム以後の語り手たちは田舎に住む貧しい人たちから成り立っていた。年令も男女ともに若くなかった。それに対しグリム兄弟にメールヒェンを語ったのは、彼らの周囲にいたほとんどが二〇代と一〇代の若い女性たちだった。みんな裕福な商家の娘とか、高級官僚、貴族の娘たちだった。庶民といえるのはフィーマンおばさんくらいだったろう。

そして彼女たちはみんな都市生活者だった。グリム兄弟もうまれてから死ぬまで都市に住みつづけていた。兄弟が僅かに村の暮らしにふれたのは、幼少年期にいた小さな町シュタイナウの時期だけだったろう。

村の暮らしに縁がなさそうな都市のお嬢さんたちが、同じように村の暮らしを実感できなかったかもしれないグリム兄弟にメールヒェンを語って有名な本ができた。だから村の人がメールヒェンにこめた心情はそこでは伝わらなかったかもしれない。世界の採話活動の手本となった本は、すでに本来の語り手、聞き手の世界を離れていた可能性が高いのである。

昔話（メールヒェン）を童話（メールヒェン）にしたのはグリム兄弟自身である。そこに使われているドイツ語はメールヒェンという一語だけであるが、そのことばの多義性は『グリム童話』といわれる『キンダー・ウント・ハウスメールヒェン』から始まった。

こうして見てくるとわが国の都市での語りの運動も、二〇世紀になってからの所産ではなかった。一九世紀ドイツにすでにあったのである。しかしそれはそれとして田舎での語りは語りで今後もひそやかに平然と生き続けるのかもしれない。「二人

の旅職人」は時代とメールヒェンのかかわりがどうだったかの一端を断片的に示しているのかもしれない。それと同時にひょっとすると今後の姿も予見させているのかもしれない。なお職人話の中で仕立屋の話がよく伝わっているのは、仕立屋に女性の仕立屋がいたことや、語り手が男性中心から女性に移っていく時代に合いやすい話であったことも考えられそうである。

（いいとよ・みちお／中央大学名誉教授）